

自分が変わること、 家族が一つになれる。

若狭教会 濱田眞代さん

濱田眞代さんは、巣立っていった二人の娘たちと同居したいと願っていた。しかし、自分にも他人にも厳しい夫は、何かあるとすぐに怒鳴り散らす性格で、それを嫌がる娘たちは減多に顔を見せず、家族はバラバラの状態だった。「どうすれば夫が変わるのだろうか」と悩んでいた時、ある人から「ご主人のつらい話を聞いて、お詫びができていいですね」と諭される。思えば、夫に不満を抱くばかりで、心の内を聞いたことがなかった。さっそく実践すると、娘たちに厳しく接することも愛情の一つの示し方だと感じられた。そして、夫に頭を下げ、「いままであなたの思いを聞こうともせず、ごめんなさい」と伝える。眼から涙があふれたが、顔を上げると、同じく涙を流す夫の姿があった。その瞬間、「変わるべきは自分だったのだ」と気づく。この心からのお詫びは夫婦だけでなく、家族全体にもいい影響を与えた。夫にも変化があらわれ、娘夫婦宅を訪れて不器用ながらも詫びたのだった。眞代さんは家族が再び一つになれる予感を覚え、あたたかな気持ちに満たされた。



肯定的か、否定的か

私たちは自分の思いどおりにならない現実を不満に思い、マイナスのこととして見る傾向があるようです。野菜農家にとっては恵みの雨が、洗濯物を干したり、観光を楽しんだりする人にとっては恨みの雨になるように、心は自分に都合よくはたらくことが多いのです。しかし、ものごとを多面的に見ると、どれほどつらく苦しいことのなかにも、必ず「有り難い」と思える要素が見出せます。なぜなら、その意味では、どれほどつらいことも人生を豊かにする賜り（たまひ）のものであり、すべては肯定すべき感謝の対象にほかならないのです。ただ、人により場合によつて、現象をすぐに「有り難い」と受けとめられないことも当然あります。

そこで、ものごとを肯定的に受けとめられないときに、自己をふり返るポイントをおさえてみましょう。人を否定する気持ちが拭えないときには、「やさしさを忘れてはいないか」。現象を肯定できないときには、「素直さを失っていないか」。この二点です。自分の思い、つまり我（が）でもものごとを見ると、人はやさしさや素直さを見失いがちなのです。

立正佼成会